

「通年型カーリング場」の完成を契機とした「カーリング授業」導入の経緯

～稚内市内公立学校校長へのインタビュー調査から～

侘美 俊輔, 水嶋 星陽

●要 約

中学校学習指導要領「保健体育科」(平成 29 年告示)では、「自然と関わりの深いスキー、スケートや水辺の活動などの指導については、学校や地域の実態に応じて積極的に行うことに留意するものとする」とされる。この指針を踏まえて、本稿において事例とする北海道稚内市内の小、中、高の各学校では、スキー授業を実施することが慣例とされていた。

ところが 2020 年 5 月、稚内市に「通年型」のカーリング場が完成したことを契機に、市内の多くの学校では「スキー授業から、カーリング授業への転換」が見られた。しかしながら、この転換の経緯については、稚内市内においても十分な説明ができる者や、書面等による記録がほとんど残されていない。

そこで本稿では、稚内市内でなぜ「スキー授業からカーリング授業への転換」が見られたのかという問いを、当時の経緯を知る校長 Z 先生へのインタビュー調査から検討し、今後の基礎資料とすることを目的とする。

●キーワード

カーリング
スキー授業
カーリング授業
通年型カーリング場
冬季スポーツ

はじめに

中学校学習指導要領「保健体育科」(2017年告示)では、「自然と関わりの深いスキー、スケートや水辺の活動などの指導については、学校や地域の実態に応じて積極的に行うことに留意するものとする」とされる。この指針を踏まえて、本稿において事例とする北海道稚内市内の小、中、高の各学校では、「スキー授業」を実施することが慣例とされていた。

三浦ら(2006)によると、学習指導要領の解釈として1978年の中学校指導書(保健体育編)では「スキー又はスケートを加えて指導することができる」と示されている」のに対し、2002年改訂の学習指導要領では「『-ができる』という付加的な内容としてではなく、それを一歩進めて『-を積極的に行う』という導入推進的な内容として、現在スキーは位置づけられている」と指摘する。しかしながら論文検索サイト「Cinii」において、2024年1月31日現在、「北海道、スキー」と検索してヒットするものが20報であり、そのうちの半数が三浦を筆頭著者とする論文である。なお「スキー、授業」に検索範囲を広げてみたところヒットしたものは42報、そのうち2006年以降に書かれた論文(学会発表要旨、重複のあるものを除く)は、7報しか見られなかった。以上のことから「スキー授業」を題材とした研究は、学術的な議論がほとんどなされていないものと推察される。

その上で、前掲の三浦らによる「北海道上川管内の中学校におけるスキー授業の現状と課題」においては、北海道内のスキー授業について「マスメディアなどでは実施率の低下が指摘されている」が、「旭川市を除く上川管内の小規模校あるいは僻地校である中学校の多くでは、今回の調査結果の実施率を見る限りにおいては、そのような状況は確認されなかった。したがって、マスコミなどで報じられている実施率の低下は、他管内あるいは都市部の状況であると推察される」と指摘する。しかしながら、スキー授業の課題として「学習指導・計画の作成等(時数削減・指導計画・目標内容・天候など)」、「指導面(指導者数・指導者の技能・子どもの学習成果)」があり、次いで「用具・服装などの経済面(用具服装の費用・リフト代・交通費など)」と指摘する。これまで北海道などをはじめとする積雪寒冷地域では、地域特性を生かした冬季スポーツの重要性が認識されつつも、「スキー授業」は学校側に多くの労力、負担をかけながら実施されてきたことが推察される。

ところで2020年5月、北海道稚内市(以降、稚内市とする)に「通年型カーリング場」として、「稚内市みどりスポーツパーク(以下、みどりスポーツパークとする)」が開業した。みどりスポーツパークの開業から現在までの足跡を辿ると、稚内市においては、2016年から2017年にかけて市議会で「『通年型カーリング場』建設の是非」が争点となっていた。当時の市民の声として、建設コスト、費用対効果、市の財政状況などを鑑み、「通年型カーリング場建設」への反対意見は少なくなかった。しかしながら2024年1月現在、稚内市のみどりスポーツパークでは、日本カーリング選手権大会、全日本大学対抗カーリング選手権大会、日本ミックスタブルスカーリング選手権大会など、日本カーリング協会(JCA)主催の全国規模の大会が多数開催された。その影響の1つとして「カーリング」や、「通年型カーリング場」への市民意識は少しずつ変容しつつあるものと推察される。その証左として、少年団組織に類似する「ジュニア・カーリングクラブ」などには、多数の子どもたちが押し寄せている。

また上述の動きと呼応するように、みどりスポーツパークの完成以降、学校現場から稚内カーリング協会、同施設への体験授業、授業依頼が増加している(写真1)。2023年度になると、稚内市内の市街地にある4中学校(=「市内4中」とする)が「スキー授業からカーリング授業」に転換した。また市内

「通年型カーリング場」の完成を契機とした「カーリング授業」導入の経緯 ～稚内市内公立学校校長へのインタビュー調査から～

に唯一ある公立高校、稚内市内の小学校（＝高学年のみの学校もある）においても「カーリング授業⁽¹⁾」の実施が始まった。



写真1：市内の高校授業における「カーリング授業」の様子

このような現状を鑑み、筆者は拙稿（佐美，2021）において体育・スポーツ領域から「主体的，対話的で深い学び」に資する授業づくりの1つとして「カーリング」に注目し，2020年8月4日に開催した教員免許更新講習において「北海道だからこそできる『カーリング』を活用した授業展開～教材としての『カーリング』の未知なる可能性～」を担当した。拙稿においてカーリングへ注目した理由は，「4人によるチームプレーを基本とし，作戦を議論しながら試行錯誤することから，新学習指導要領における『主体的，対話的で深い学び』との親和性が高いものと推察される」ためである。

しかしながら，「スキー授業からカーリング授業への転換」の経緯については，稚内市内でも十分な説明ができる者や，書面による記録がほとんど残されてない。そこで「稚内市内において，なぜスキー授業からカーリング授業への転換が見られたのか」という問いが浮上した。市井から聞こえてくる要因としては，近年のスキー離れ，新型コロナウイルス感染症，校長会の裁量など様々な理由が聞こえてきたものの，いずれも明確な根拠がある回答とは言い難いものであった。

そこで，本稿では「稚内市内でなぜスキー授業からカーリング授業への転換が見られたのか」という問いを，当時の議論の経緯を知る校長Z先生へのインタビュー調査から検討し，今後の基礎資料とすることを目的とする。なお，筆者は拙稿（佐美，2023）において退職後5年以上が経過している元退職校長のAさんに「カーリング導入のメリット」や，「学校授業で取り入れるためには何が必要か」などのインタビュー調査を2022年3月に実施した。本稿では，Z先生，Aさんへのインタビュー調査の双方から，より学校現場に即した具体的，実践的な検討を行う。

本稿において事例とする稚内市は、同市のホームページによると「日本最北端に位置する稚内市は、宗谷海峡をはさんで東はオホーツク海、西は日本海に面し、宗谷岬からわずか43kmの地にサハリン（旧樺太）の島影を望む国境の街。『水産』・『酪農』・『観光』を基幹産業とする宗谷地方の行政、経済の中心地です。稚内と交流の盛んなお隣の国、ロシア連邦サハリン州をはじめとする北方圏諸国への玄関口としても知られています」とある。また、2024年1月31日現在、稚内市の人口は約30,000人である。

稚内市の教育環境について付記すると、市内には小学校11校、中学校7校があり、そのうちの2校は併置校である。また市街地には4校の中学校があり教育関係者の間では「市内4中」と表現される。高等学校は北海道立の公立高校が1校、私立高校が1校である。本稿においては、カーリング場（=みどりスポーツパーク）へ30分以内でのアクセスが可能な市街地に立地する学校について中心的な話題とする。

1. 拙稿における元退職校長Aさんへのインタビュー調査の振り返り

前述のAさんは、調査を実施した2022年の3月時点で、退職から5年以上経過していたものの、宗谷管内での教員、管理職、さらには大学での教育歴を有する人物であった。Aさんへのインタビュー調査を行った理由は、管理職として「校長や各学校の裁量権」、「学校における予算付け」、「市教育委員会、北海道教育委員会との折衝」などを熟知し、一方で教諭（=いわゆる平教員）としての「教科担当者の裁量」や「学校教員の多忙さ」など双方の経験を有するためである。さらに宗谷管内での教育歴が長いこと、地域の実情に詳しいこともインタビューを実施した理由の1つであった。一方で、現在の稚内市教育委員会への政策等の助言は行っていないことから、校長の経験、教諭の経験双方の立場から「客観的な意見」を述べられる人物の1人であった。その上で、本稿において再提示するのは下記の点である。

カーリングを学校の『授業』で取り入れるにあたっての課題

《どうやったら、稚内や、学校にカーリングを定着させられるか？》

カーリング場は、「夏」もできるんだよね。そうするとカーリングという競技は、夏の競技の中に取り込むことができるし、冬に関係ない。マイナス面でいうと、（北海道の冬の体育授業で当たり前の）スキーが（若者たちに人気のある）スノーボードにはなっていないんです。理由は金かかるから。どうしてかという（道具を）持っているのもいるけども、持っていない子は、スノーボード用意しなければならない。今の時代だからスキーウェアで、スノーボードはいかないでしょ。ところがカーリング、金かかんないよね。今言ったように夏冬、季節に関係なく稚内で。体力作りのためにできるっていうふうになると、これは（学校現場の受け取り方も）違う。

《単元としての組むのは難しいか？》

体育の中で組むとしたら、せいぜい8時間ぐらい。移動も入っちゃうから、実質、ちゃんとカーリング場っていうか、真ん中で少し時間とったら、せいぜい3、4時間ぐらいに。

「通年型カーリング場」の完成を契機とした「カーリング授業」導入の経緯 ～稚内市内公立学校校長へのインタビュー調査から～

それでも「1単元」としてカーリングっていうふうに、大事なのはさ、全ての子どもが経験できるっていうのは、大事なところ。

《カーリング場への移動時間、距離的に遠い学校はどうすればよいのか》

そういうふうになった（=かつてのプール授業にバスでいっていた）のと同じように、バスでカーリング場に来て、水泳の代わりに夏、カーリングをやります。そしたら学校が面倒見きれなかったら、夏やるところと、秋やるところ、冬やるところっていうふうになれば、今の学校数ならなんとかなるんじゃない。カリキュラム上は、すべての学年じゃなくてもいいしよ。（中学校）2年生になったらやります中学校。それから小学校は高学年でもいいから、5年生、6年生でありますっていうふうに位置づけたら、裾野が広がるかなあ。

その上で、筆者による指摘は、第1に、「カーリングは手袋、帽子などの簡単な防寒対策をすれば授業が可能である。カーリング用具はカーリング場で無償レンタルすることができ、家計にも優しいウィンタースポーツである」点である。第2に、Aさんの言う「かつて稚内市で実施されていた水泳授業の送迎のような体制を構築できれば、市内小中学校によるカーリング授業の可能性は大いにあるだろう」とし、そのための「行政による環境整備が不可欠」であることを指摘した。また今日時点での考察を付言すると、第3に「すべての子どもが経験できる」平等性の担保や、第4に「小学校高学年から、中学校まで」継続した取り組みによる「裾野」の拡大について言及していたことも指摘できる。

いずれにせよ、Aさんへのインタビュー時の稚内市内の各学校における「カーリング授業」の実施状況は、ほとんどの学校でまだ検討中の段階であった。2022年3月、つまり2021年度の時点で上記のような指摘や、可能性に言及していた点は、本稿においても多くの示唆があるものと考えられる。

2. 稚内市立Y学校 校長Z先生へのインタビュー調査

2023年11月22日、筆者らは、稚内市内の公立Y学校に勤務する校長Z先生（以下、Z先生とする）にインタビュー調査を実施した。Z先生への調査は、2023年11月22日の午前11時から約45分間、Y学校における校長室内で行われた。Z先生への主な調査内容は「市内の学校でなぜカーリング授業が導入されたのか」、「市内の各学校でカーリング授業が実施された結果」などを中心に半構造化インタビューを行った。Z先生は、みどりスポーツパークが完成した2020年前後から現在まで、稚内市内の学校で校長の職にあり（稚内市内間での異動はあり）、「校長会」への参加、稚内市教育委員会から「カーリング授業」導入への説明を受けた経験を有する希少な人材の一人である。そのため、筆者らはZ先生にインタビュー調査を申し込んだ。

なお、Z先生の方言、語り口調は、インタビュー当初の雰囲気を残すためそのまま掲載しているが、必要に応じて筆者が（ ）にて注釈を加えている。固有名詞等は【 】によって、差し替えを行っている。また筆者らによる質問は、《 》によって表記している。

2-1. 校長Z先生へのインタビュー調査結果

稚内市内において「カーリング授業」が始まったきっかけ

多分僕の記憶が正しければ、何年ってというのはちょっと調べてもらえればと思うんですが、最初にやりだしたのは(私立稚内)大谷高校です。【カーリング協会の知り合いが】先生でいた関係もあるのかなとは思いますが、いち早く、いろんなね、スキーの用具のお金がかかるだとか、それで結局2回か、3回しかやらないっていうのもあったりして、そういう意味では「貧困対策」ってこともあったのかもしれないんですが、大谷(高校)では真っ先に始まっていました。

僕が【市内中学校】に行ったのが、2003年なんですけれども、そのときにはもう既にカーリングに(稚内市立)稚内中学校はなっていました、体育の授業でですね。これは稚内公園にスキー場がまだあったんですが、昔は、何年に無くなったのかな、無くなるのをきっかけにして(=スキー場の閉業は2006年3月)、それまではそこでスキー授業もやってたんですが、「カーリング授業」に切り替えました。当時は(稚内市街地からやや離れた)ノシャップにあったので、そこを利用して、それこそスキーと同じぐらいの時数を使って、稚内中でもやってみました。

みどりスポーツパークの建設と冬季スポーツ授業における種目選択機会の提供

「みどりスポーツパークをどんなふうにするか(シート数を4シートにするか、5シートにするか、その際の建設費、費用対効果などが議会の争点となった)」っていうあたりから、ちょっと(市内でいろいろ)大変だったのかなと思っていますが、スキー授業は結局、「雪に左右される」っていう要素と、バザーかなんかを使いながら、道具はいらなくなった家庭からうまくやってたっていうのはあったんですが、もうちょっと辿ると、一昔前までは(稚内市立)東小学校では、スケートもやってたんです。ただ、やっぱりリンクの管理も含めて難しくなったし、冬のスポーツっていうことで、天候に左右されたり、それを維持する人たちの大変さっていうことがあって、ずっと学校では課題であって、新しく「みどりスポーツパーク」ができて、カーリング場の設備が整うってことに当たって、市としても「学校の授業で活用を！」っていうことは(稚内市教育)委員会(=以降、市教委とする、Z先生も含む教育関係者は会話等では「市教委」と呼ぶことも多い)からもありました。

ただそれは同時に「スキーをやめるという意味ではなかった」ので、「スキーと両立するのか、切り替えて管理するのかっていうのは各学校の判断だった」のかなというのがあります。(稚内市立)稚内中はずっとそういった意味では、カーリングやってきたのでスムーズに移行したし、中学校でいうと元々3年生はスキーやってないので、中1、中2がスキー授業っていう話だったんですが、高校も結局、乗らない子はもう中学生になったら全く乗らなかったり、ボードに切り替わったりっていう時期だったので、そのためだけにスキー買うのかっていうのは、かなり保護者の中には「負担としては…」っていうこともあって、それこそ【市内中学校(=Z先生が校長を務めていた学校)】では、切り替えようということで、最初の年は…でも、いっぺんに切り替えたんだったかな。僕の意図ととしては、「次の年から切り替えますよ」って言った年だったような気がするんですが…。だからす

「通年型カーリング場」の完成を契機とした「カーリング授業」導入の経緯 ～稚内市内公立学校校長へのインタビュー調査から～

ぐ切り替えたというよりは、予告をして「新しく買わなくていいよ」ということも含めて、次の年からという意向にしました。それは「各学校で全部検討になっていた」ので、小学校も中学校もですね。

今、【市内小学校】でいえば、今年度から昨年度のうちに、5、6年生については、カーリングにしますということを書いて、今年度から5、6年生はカーリングの授業を導入しています。そういう意味で言うと義務教育8年間、中3は除いて8年間の間で最初の4年間はスキー。後半の4年間はカーリングということで、一応「バランスをとったつもり」ではいるんです。両方を触れようということで、今スタート切った年です。でもカーリングの良さは季節、雪がなくても関係なくできるので、そういう面では授業のセットの仕方として良かったかなと。今までだったら、吹雪でスキー中止とか、次どうするとかっていうのもあるんですが、その作業がなくなったってことは1つ大きくあります。僕は元々スキーをやる人間なので、スキー人口は減らしたくないっていうのもあるんですが、ただ、いろんなものに触れるっていうことは大事なので、選択肢が1つ広がって、スキーとカーリングを体験して、あとは自分のやりたい方やって、両方やってもいいですし、というふうには思ってます。やるんだったらね、常呂とかちょっと北見ぐらい（の街の盛り上がり、熱狂ぶり）まで行ってやってほしいなど、何よりもやっぱり冬場のスポーツの1つとして子どもたちの機会が増えるっていうのは非常にいいなど。

稚内市教育委員会による校長会へのアプローチ

《市教委から学校でカーリング導入を検討してくださいという話があったと思うんですけど、「校長会」ではどのような議論がなされていましたか？》

（校長）会としてどうこうかはなかったんですが、校長会の中で「各学校で活用を検討してほしい」ということは、市教委からそういうふうと言われて。校長会で何かみんなで手を揃えてみんなで一緒にやりましょうっていうのはないんですね。そういう意味では稚内中はもうやってたから。他の学校がどういう判断をしながらやっていくか。基本的に教育課程は市には続きますけれども、各学校で対応して作っていく、その責任者は校長ってなっているので、基本的には各学校の判断っていうふうになってます。足並み揃えて、みんなで「こうしよう」、「ああしよう」はない。《ここ1、2年で多くの学校が「カーリング授業」を取り入れてますよね、それは結果として各学校で判断しているということですか？》そこ（=各学校）で判断した形ですね。さっき言った課題が、スキー授業経費の問題、天候に左右される、ある年は雪がずっと1月中降らなくて、スキー場がオープンしないっていう年もありました。だから、そうなるともう教育課程、いわゆる時間割も含めて編成が非常に難しく、変更も含めてという課題は元々あったんですね。

コロナ禍による冬季スポーツ授業への影響

（市教委から）呼びかけがあったのは、コロナ前なんですけど、（カーリング場）できた年って？《2020年の5月です》そしたらコロナですよ。20年の2月からですもんね？《そ

れぐらいからポツリ、ポツリと国内で感染者が出てきた時期です」ただコロナは、あんまり考えずに検討してたと思います。「コロナがあったからカーリング授業になったわけではないのですか？」全然ないです。むしろコロナがあったら、スキーの方が大丈夫かみたいな。ロッジの問題はあったけれども、屋外だから。密とか何とかは考えてなかったと思うんだけど、バス移動ぐらいでしたもんね。まあ（カーリング、スキーの）どちらもそうですね。

教師、学校の立場から見たスキー授業の負担感

「教員側の負担とか、スキーとカーリング比較してみた場合に学校全体の教職員全体としての負担感みたいなのはいかがですか？」

僕は圧倒的に少ないと思うし、新しいスポーツをどう教えるかっていうその技術指導の面は当然新しいことやらないといけないこともあるし、怪我の確率はひよっとすると増えるかもしれないので、そこへの配慮っていうのは当然必要なんですけど、何よりも計画的にできる。この日にやるったら、この日にできるんですよ。それは学校全体見てもかなり大きいなと思うんですよ。例えば朝から今日は風速何メートルだ、リフト止まるんじゃないか、今日できなかつたらどうするって、給食切ってますから。うちなんかでいうと、ただ弁当は、その日は食べるけど・・・みたいなってそういう負担は、カーリングにすればゼロになるってことですね。学校全体としてもうちは【n】学級あるので、見通しを持ってできる。あと3年生4年生、2年生ぐらいだと、1年生は学校でやるので、簡単に言えば、半分になる。その調整に関わる負担が非常に減りましたね。

根本的なのは、やっぱりスキー人口の減少っていうのもあったと思うし、やっぱり天候に左右されるっていうのは、学校としては時数管理が難しい中で、かなり厳しくなると思ってたし、それでもやろうってやってたんだけど、「煩わしさ」っていうのはやっぱり元々付きまとった。結局スケートなんかもそうだと思う。リンク作る大変さとか、それでもスケートやらそうって、僕なんかも（稚内市立）東小のスケートリンクで滑った方だし、（稚内市立）中央小のスケートリンクで滑ったこともあるし、僕が教員になった頃には、もうなかったかもしれない。でも今でもね、やっぱり道東だとか、ちゃんと水撒いててね、稚内の中で冬場のスポーツどうするかっていうのは、なかなか計画的には進めてこなかった。やっぱり学校に頼りすぎてた。スケートも、スキーもやっぱり社会教育として、今ようやくカーリングを稚内のスポーツとしても、推進していこうといういろんな意見があったりして、僕は良かったんじゃないかなと思いますよ。

子どもたちがいろいろ体験していく中で、選ばれていく。だからこそ学校では、僕はスキーも経験するし、カーリングも経験するっていうバランスは、これがみんなカーリングになると、カーリングの街で、スキー場どうなるの？って必ずありますよ。その2つぐらいはスケートもね、学校に頼ってたからなくなっちゃったけど。

学校の予算面からみたカーリング

うちはそこ（＝カーリングの際には）も含めて、中学校のスクールバスと（教育）委員会のバス

「通年型カーリング場」の完成を契機とした「カーリング授業」導入の経緯 ～稚内市内公立学校校長へのインタビュー調査から～

をお願いしたので、それまでスキーに行くってなると、(民間の)【バス会社】なので、この経費は保護者から年間 1,000 円ずつかな?集めてました。それは 5, 6 年生の中で、学校からの持ち出しは、謝礼ぐらいなんだけど、それも(教育)委員会からいくらかは出るんで、経費ってことでは圧倒的に、負担は少なくなったと思うんですよね。本格的にやったらね、カーリングも掛かるんだろうけども、スティック(=ブラシの意味)用意してとか、シューズ用意したらね。ただ今、それは全部「安全器具(=ヘルメットなど)」含めてちゃんと用意してもらってるんで、すごくやはり親しみやすいというか、小学校としても「中学校(へ)行ってもやるんだよ」って言えるかな。「なんで小学校だけ?」っていうふうにはならないっていうのはあります。

「通年型カーリング場」完成後の「カーリング授業」導入による総括

スタートしたばかりなので、これからやっぱりそういう競技を目指す人が、冬場は運動して、冬場のスポーツだけでも、夏もできるので「通年型」として「もう新しいスポーツ」ですよ。例えばスポーツに触れる子どもたちを増やしたい。(テレビ)ゲームじゃなくて、それはもう野球であっていいしサッカーでもいいし、バドミントンでもいいし、カーリングでもいいし、スキーでもいいしボードでもいいってことなんだけど、その施設や体制ってのは、できるだけ地域の中で作ってほしいなっていうのはすごく思います。学校は本当に「入口だけ」なので、そこで興味を持った子や、逆にスポーツ少年団とかでやってる子は企業でも活きるだろうし、この子こんなにカーリングできるのかって、そこを立ててくれば、なんか普段は走るの苦手だけどカーリングすごいとか、どこで子どもたちが輝くとか、そのチャンスは多い方がいい。

2-2. インタビュー調査結果の小括、考察

前節のZ先生へのインタビュー調査について、以下では5点に分けて検討を行い、考察を行う。その際には、第1章で提示した元退職校長のAさんによる語りも参照する。

第1に、みどりスポーツパークが完成する以前から、実施していたのは2校のみであったという事実である。以前のカーリング場は、稚内市ノシャップ地区に「稚内市スポーツセンター」があり、その一角に存在していた(=旧カーリング場とする)。拙稿(2020)で提示したように、元々は米軍施設の冷凍設備を再利用して作られたものであった。Z先生の語りの中に出てきた稚内市立稚内中学校は、旧カーリング場に市内の中学校でもっともアクセスしやすい学校であった。

また、Z先生の語りによると、稚内市内で「カーリング授業」が最初に始まったとされるのは、私立の稚内大谷高校であり、その導入のきっかけは、【カーリング協会の知り合いが】先生として勤務していたことではないかと推測する。Z先生の語りの中で重要と考えられる点は、「…そういう意味では『貧困対策』ってこともあったのかもしれないんですが」という部分である。このZ先生の発言を解釈するためには、稚内の歴史、経済史から考える必要があるだろう。

水産庁のホームページ「(1) 遠洋漁業等をめぐる国際情勢」によると、「遠洋底びき網漁業がピークを迎えていた昭和40年代後半、南米、アジア及びアフリカ諸国を中心に、沿岸国の利益の保護

を目的として、沿岸 200 海里内での漁業等に関する沿岸国の排他的な管轄権を主張する動きが急速に強まりました」とされ、1977 年には「米国及びソビエト連邦をはじめカナダや欧州共同体 (EC) 諸国も 200 海里水域の設定に踏み切り、これにより、事実上 200 海里時代が到来しました」とある。冒頭で提示したように、稚内市は「水産」が基幹産業の 1 つであったため、漁師をはじめとする稚内経済は大打撃を受けた。その結果、親が失職し、子どもの荒れや、素行不良、「貧困」といった問題も同時に惹起した。この問題に教育関係者が立ち上がった活動の 1 つが、宗谷の「子育て運動」であり、その結果として作られた「南中ソーラン」であろう (侘美, 若原, 2016)。こうした地域の実情を踏まえ、「スキー授業」ではなく、「カーリング授業」を実施したというのが Z 先生の「貧困対策」という 4 文字の裏側ではないかと考えられる。「カーリング授業」にすることで生じる経済的なメリットについては、A さんの語りにも類似するものが見られた。

第 2 に、「スキー授業実施の難しさ」についてである。「一昔前までは、(稚内市立) 東小学校では、スケートもやってたんです。ただ、やっぱりリンクの管理も含めて難しくなっただし、冬のスポーツってということで、天候に左右されたり、それを維持する人たちの大変さってということがあって、ずっと学校では課題であって」とあるように、スケート、スキーなどの冬季スポーツは、当日の天候、積雪量、維持する人の大変さなど様々な問題が付きまとう。Z 先生によると、「教育課程、いわゆる時間割も含めて編成が非常に難しく、(スキーから別なものへの) 変更も含めてという課題は元々あった」という。

教育界では「雨降り保健」という言葉もあるように、体育、保健体育科では他教科と違い、グラウンドでの活動には雨天中止の可能性が付きまとう。そのため、常に雨天時の教室授業や、体育館授業などのバックアップ授業を考えなければならない。その上で「根本的なのは、やっぱりスキー人口の減少っていうのもあったと思うし、やっぱり天候に左右されるっていうのは、学校としては時数管理が難しい中で、かなり厳しくなると思ってたし、それでもやろうってやってたんだけど『煩わしさ』っていうのはやっぱり元々付きまとった」とあるように、現在の文科省、学習指導要領では「時間管理」の問題が付きまとう。そのため雨天、悪天候で中止となった場合には、「振替」や、「代替」の時間が必要となる。さらに学校の場合は「給食」を止めるなど、計画的に進めなければならないものもある。そのあたりを勘案した結果、スキー授業における「『煩わしさ』っていうのはやっぱり元々付きまとった」という語りになったものと推察される。

その点、「カーリング授業」へ切り替えたことのメリットとして「うちなんかでいうと、(スキーが中止になり、給食もでない) ただ、弁当はその日は食べるけど…みたいなってそういう負担は、カーリングにすればゼロになるってことですね。学校全体としてもうちは【n】学級あるので、見通しを持ってできる」というように、基本的に天候に左右されることなく、原則として中止を考えなくても良い(=旧カーリング場時代は、冷却機械の故障等による臨時休館があった) 点は、教師、保護者側の負担軽減という点には有益であるものと推察される。

第 3 に、学校における体育、保健体育科授業は「入口」という視点である。Z 先生の語りの中では、筆者らの質問に対する返答として、カーリングのみならずスキーや、スケートなど他のスポーツに言及するものが多かった。彼の教育観の根底には「学校では、僕はスキーも経験するし、カーリングも経験するっていうバランス」という視点や、「小学校としても『中学校(へ)行ってもやるんだよ』

「通年型カーリング場」の完成を契機とした「カーリング授業」導入の経緯 ～稚内市内公立学校校長へのインタビュー調査から～

って言えるかな。『なんで小学校だけ？』っていうふうにはならないっていうのはあります」というように、小、中学校の接続や、継続性を意識した発言が見られた。学校体育がなすべきことは「入口」であり、そこで興味を持った子どもが「競技」へと向かうことや、さらには1年だけではなく、何年も継続的に関わることができる「教材」として、カーリングを「多様な視点から」位置付けていることが推察される。この点については、Aさんも小、中学校の「カーリング授業」の継続による「裾野」の拡大についても言及していた。

第4に、「稚内市、地域社会への問題提起」である。「稚内の中で冬場のスポーツどうするかっていうのはなかなか計画的には進めてこなかった。やっぱり学校に頼りすぎてた」というように、先に見たように稚内市は「子育て運動」、「南中ソーラン」などの実践を見ても、「学校」や「先生方」からの問題提起が多かった地域である。このような現状を踏まえ、Z先生の「学校に頼りすぎていた」という発言を読み解くと、合点がいくのではないだろうか。さらに「…その施設や体制ってのは、できるだけ地域の中で作ってほしいなっていうのはすごく思います」という点でいうならば、2022年4月に総合型地域スポーツクラブ「一般社団法人みどりスポーツクラブわかない^②」が誕生した。同クラブは、2023年4月からみどりスポーツパークの指定管理者となり、これまでの指定管理団体とは異なる「民間的手法」を取り入れようと試みている(侘美, 2024)。

最後に、本稿の問いであった「稚内市内ではなぜスキー授業からカーリング授業への転換が見られたのか」について検討したい。市井では、スキー離れが進んでいるから、市教委の要請、コロナ禍だから、校長会の決定など様々な理由が言われていたものの、結論としては「各学校の判断でカーリング授業を実施することにしたから」ということになる。その布石として、どこの学校でも「スキー授業」について、「地域の特性」を生かした冬季スポーツとしての重要性と、一方で計画的に授業を運営できない「煩わしさ」の両面を抱えていた。また近年のスノーボード人気、保護者へ金銭的な負担感など、「スキー授業」を積極的に推進する理由が見出しにくくなりつつあった。そこで稚内市内の各学校では「通年型カーリング場」が完成したことを契機に、「カーリング授業」が選択されたのではないだろうか。唯一のネックになり得た移動に関しても、市教委、市スポーツ協会、各学校がバスによる送迎の仕組みを作った点も大きい。この点は、A先生が言っていた「水泳の送迎と同じような仕組み」であろう。

結果として「カーリング授業」は、移動距離、教職員の負担、授業計画の立てやすさなど、図らずも体育教師の視点からネガティブな要因がほとんど見当たらなかった。みどりスポーツパークの開業前には「通年型カーリング場」建設に対して、費用対効果などから批判的な意見も多かった。しかしながら開業後は、ロコ・ソラーレなど映像の世界でみる選手たちが、稚内市を訪れるようになった。そのため今では、カーリングのもつ可能性に多くの学校関係者、市民が気づき始めたのではないだろうか。市井では「来週からカーリング授業が始まる、楽しみ」などの声を筆者も聞くようになり、徐々にではあるが、稚内に「カーリング文化」が根付こうとし始めている。

しかしながら、Z先生が言うように「バランス」、「学校は入口」という語りは大切にすべき視点である。さらにZ先生が指摘したように、冬季スポーツを授業が計画的に進めやすい「カーリングのみ」でよいのかという点は、再考する必要があるだろう。その際、A先生が言ったように「通年型」のメリットを最大限生かし、「夏(=雪がない時期)」に「冬季スポーツのカーリングを実施する」とい

うことがあっても何ら問題はないだろう。昨年、稚内市では「熱中症警戒アラート」が（制度運用後）初めて発令されたが、市内の各学校の教室や、体育館などに「クーラー」などの冷房装置は設置されていない。そのため猛暑が増えつつある稚内において、夏場に「寒冷下（室温 10 度前後）」で行える「カーリング授業」は、熱中症対策、事故防止の観点からも有益であろう。このように夏場に「カーリング授業」を実施することでスキーや、スノーボードなどの「冬にしかできない種目」との併用も可能になると考えられる。Z 先生も「冬場のスポーツだけでも、夏もできるので『通年型』として『もう新しいスポーツ』ですよ」ということを認識していた。このような授業を展開できるのは、稚内市に「通年型カーリング場」がある恩恵である。

おわりに

本稿は「稚内市内でなぜスキー授業からカーリング授業への転換が見られたのか」という問いを、当時の議論の経緯を知る校長 Z 先生へのインタビュー調査から検討し、今後の基礎資料とすることを目的としていた。

結論としては「各学校による判断の結果」である。ただし学校現場において、潜在的に「スキー授業」は、天候などの影響を受けることから計画的に授業を進めにくい教材として「悩みの種」の1つであったものと推察される。一方の「カーリング場」は、授業を計画的に進めやすく、「通年型カーリング場」を有する「地域の特徴を」前面に出し、「保護者への負担がない」という「三方よし」と言えるだろう。その結果として「市内4中」を中心に「スキー授業からカーリング授業への転換」が見られたのではないだろうか。その証左として、「カーリング授業」への転換が「通年型カーリング場」の完成から「わずか3年」というスピードで達成されたことから推察できるであろう。

ここで本稿の限界と今後の展望を述べておきたい。本稿は、主に1人の校長へのインタビュー調査を中心に検討してきた。それゆえ調査者によるバイアス、理論的、質的な分析における方法論的な甘さは否めない。さらなる理論的な探求、調査母数の拡大、経年的なデータの蓄積など、本稿をさらに発展させることは可能であると考えられる。

最後に本稿の今後の展望について述べたい。今後の展望は2つある。第1に、本稿の経緯で導入された「カーリング授業」についての実践的な検討である。授業の実践研究、教具の開発、体育科教育学における授業議論との擦りあわせを行うことも可能になるであろう。

第2に、他地域における調査の実施である。北海道の北見市常呂町では、長きにわたり継続的なカーリング普及、選手強化が進み、国内トップクラスの選手を多数輩出している。同時に、市内の学校では「カーリング授業」が取り入れられているという。このような北見市における実践から、「カーリング授業」のノウハウなどを学ぶことが必要と考えられる。

今後も地域の中に埋め込まれたカーリングの実践にこれからも着目することは、日本のカーリング界の発展に寄与するものと推察される。以上の課題に取り組むことを筆者らの課題とし、本稿を結ぶ。

●注

(1) 「カーリング授業」

本稿でいう「カーリング授業」は、稚内市内で行われているカーリング授業を指す。体験会、見学旅行（≒修学

「通年型カーリング場」の完成を契機とした「カーリング授業」導入の経緯 ～稚内市内公立学校校長へのインタビュー調査から～

旅行) などの一環で取り入れられる時限的なものではなく、カリキュラムに位置付けられ(=授業時数が割り当てられ)、系統的な学習を行っているカーリング授業を指す。稚内市の「カーリング授業」は、保健体育科の教師が1～3名程度で独自に実施するケースが多く、稚内カーリング協会の協会員が手伝えることはほとんどない。そのため各カーリング協会が主催し、日本スポーツ協会の「コーチ1」保持者などが担当する「カーリング体験会」とは内容的に異なる場合も多い。

(2) 一般社団法人「みどりスポーツクラブわっかない」

2022年4月、会員募集は2022年10月稚内市に誕生した総合型地域スポーツクラブである。詳細はこちらのサイトを参照されたい。<https://midospo.com/>

●参考文献

Cinii, <https://cir.nii.ac.jp/> (閲覧日: 2024年2月11日)

公益社団法人日本カーリング協会 <http://www.curling.or.jp/about/about000.html> (閲覧日: 2024年2月11日)

三浦裕, 竹原 祥介, 米田 健二, 中村 正道, 2006, 「北海道上川管内の中学校におけるスキー授業の現状と課題」, 『へき地教育研究 (北海道教育大学へき地教育研究センター)』 61: 1-8.

文部科学省, 「学習指導要領『生きる力～学びの, その先へ』」

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/ (閲覧日: 2024年2月11日)

大沼義彦, 2010, 「小さな町の大きな挑戦」, 石井隆憲, 田里千代=編著『知るスポーツ事始め』, 明和出版, 東京, pp2-6.

水産庁 「(1) 遠洋漁業等をめぐる国際情勢」 (閲覧日: 2024年2月2日)

https://www.jfa.maff.go.jp/j/kikaku/wpaper/h28_h/trend/1/t1_1_2_1.html#:~:text=%E6%98%AD%E5%92%8C52%EF%BC%881977%EF%BC%89%E5%B9%B4%E3%81%AB,%E6%99%82%E4%BB%A3%E3%81%8C%E5%88%B0%E6%9D%A5%E3%81%97%E3%81%BE%E3%81%97%E3%81%9F%E3%80%82.

佐美俊輔, 2020, 「『カーリング部』設立メンバーによる4年間の取り組みと地域づくりの可能性～稚内北星学園大学カーリング部の歩みを事例に～」, 『稚内北星学園大学紀要』 21: 46-83.

—2021, 「『主体的, 対話的で深い学び』に向けた教材としての『カーリング』の可能性～『免許状更新講習』における『カーリング』を活用した授業展開～」, 『稚内北星学園大学紀要』 22: 55-80.

—2023, 「『主体性, 対話的で深い学び』に向けた教材としての『カーリング』への期待～市内教員向けカーリング授業事前研修の試み～」, 『育英館大学紀要』 1: 67-86.

—2024, 「『通年型カーリング場』を基盤とした総合型地域スポーツクラブの取り組み～「SC 軽井沢クラブ視察」を事例に」, 『育英館大学紀要』 2: 印刷中.

佐美俊輔, 若原幸範, 2016, 「『南中ソーラン』の今日的意義と課題の検証①」, 『稚内北星学園大学紀要』 16: 49-80.

東原文朗, 2019, 「よそでおこなわれていないスポーツを振興していたら, まちづくりにつながった! 育つべくして育ったカーリング娘」, 松橋崇史, 高岡敦史=編著『スポーツとまちづくり

の教科書』，青弓社，東京，pp.118-122.

稚内市ホームページ，<https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/>（閲覧日：2024年2月2日）。

●謝辞

本稿は，JSPS 科研費 [JP22K17734](#) 「『通年型施設』の完成を契機とした地方のカーリング普及・拡大・選手強化の実証的研究（研究代表者：侘美俊輔）」による助成を受けました。研究経費のご支援に感謝申し上げます。またインタビュー調査にご協力頂いた2名の皆様に御礼申し上げます。また，インタビューデータの整理を担当してくれた育英館大学3年の伊東真平くんのご協力にも感謝いたします。

●英文タイトル

How "Curling Classes" were Introduced in Schools after the Completion of a "Year-round Curling Arena"
:From interviews with principals of Wakkanai City Public Schools

●英文要約

The Guidelines for the Course of Study for Junior High Schools, "Health and Physical Education," (published in 2017) states, "Attention shall be paid to the teaching of skiing, skating, and waterside activities that are closely related to nature, in a positive manner according to the actual conditions of the school and local community." Based on these guidelines, it had been customary for elementary, middle, and high schools in Wakkanai, Hokkaido, which is the case study in this report, to offer ski lessons.

However, with the completion of a year-round curling arena in May 2020, many schools in Wakkanai switched from skiing classes to curling classes. However, there are few people in Wakkanai who can provide sufficient explanations or written records of the process of this conversion.

Therefore, the purpose of this paper is to examine the question of why "the conversion from skiing classes to curling classes" was observed in Wakkanai City, based on an interview with the principal, Mr. Z, who knew the circumstances at that time, and to provide basic data for the future.

●英文キーワード

Curling

Ski Lessons

Curling Lessons

Year-round curling arena

Winter Sports